

Title	マルサス人口論各版和訳本の研究
Sub Title	
Author	竹村, 豊太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.12 (1926. 12) ,p.1624(112)- 1664(152)
JaLC DOI	10.14991/001.19261201-0112
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19261201-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルサス人口論各版和譯本の研究

竹村 豊太郎

- 一、マルサスの「人口論」 一一二
- 二、和譯本の先驅 一一四
- 三、アシレー版譯本 一一七
- 四、初版譯本 一二五
- 五、正版譯本 一三九
- 六、今後の期待 一五一

一、マルサスの「人口論」

人口論をマルサスによつて讀むことは種々の興味がある。それは歴史的に有名な學說である。それは經濟思想發達史上重要な地位を占めて居る。又、それは「自明」の表装をつけ、「公認」の封印を帯びながら、轟々たる反對と非難とを蒙つた説である。然もそれはそれにもかゝらず今や我國民に取つても當面の大問題について、世界的に、打ち破り難いと思はれた原理を樹立した説である。

そのマルサス人口論が今日の我國に於て、時と處を得て、種々の數多き翻譯を通して我國に紹介されてあることは喜ばしい。一體翻譯者(勿論私は眞面目な翻譯者のみについて云つて居る)の仕事には著作者のそれと異つた一種獨特な苦心が伴ひ、然もこの苦心は著作の場合程の強烈な創作本能満足への快感を伴はないが故に、時には甚だしい苦痛そのまゝの姿で心を壓迫する。私は數頁の大冊が譯了され世上に提供されたものを手にする毎に、その譯者の精根を嘆賞し、且其非利己的な勞作のかけにひそんで居る學問的他愛心に感謝せざるを得ないのである。實に、親しく翻譯に經驗を持つ人の屢々云ふ如く、名譯とて云はれる程の翻譯は下手な著作よりも精根を要すると共に、下手な著作よりも世を益することが多い。

翻譯者の勞作に衷心の同情と敬意を忘れざらんとし、且學問の進歩の爲に翻譯が關係することの大なることを確信することが、私をして一の私心と混へることをなきこの譯書批評の一文を草せしめるに到つた。

一口にマルサス人口論と云つても種々の版本のあること、殊に一版と二版以下の諸版との間には著者自身が別著と見做したいと云つた程の構文並に結論上の相違のあること、は人の熟知することである。私は本論を急ぐ爲に、マルサス文獻論上のこの重要な部分の論述を、では諸先學の研究を以て補ふに止めなければならぬ。(註)これらの諸版を私は一般の分ち方に和譯書の立場からする便宜を加味して、初版、正版、アシレー版の三種に大別する。初版は普通に第一版と云はれるものの、即ち *An Essay of the Principle of Population*, as it effects the Future Improvement of Society. With remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and Other Writers. 1798. を指す。正版は第二版以下の、即ち *An Essay on the Principle of Population; or, a View of Its Past and Present Effects on Human Happiness; with an enquiry into our prospects respecting the future removal or mitigation of the evils which it occasions.* の表題ある増訂諸版を總稱する。アシレー版は Ashley 教授の慶賀にかゝる「經濟學古典」第三冊として出た「第一版第二版對照マルサス人口論抄」(Parallel Chapters from the First and Second Editions of An Essay on the Principle of Population by T. R. Malthus 1798: 1803.) を指す。

一體、マルサスの人口論なる著書を各版本年代に於けるマルサスの思想を沿革的に窺はしむる爲にでなく、又著作年表的な意味にでもなく、經濟學史上の一人物の業績を示す爲め著述として最も簡單に擧げるべき場合に、その何れの版本を参照することが最も公平であり正しくあるか。私が第二版以下を正版と呼び、第一版に對して、序數以外の意味ある名稱を附して相違を明かならしめた

ことはこの質問に答へる。彼の傳記者は初版發行の日付を以て彼の人口論を記録するであらう。彼の著作年表も初版を重要視するであらう。けれども、今日われわれが彼の人口論によつて理解する説は第二版及その以後のものの内容であり、殊にマルサス在世中の最終版たる第六版を以て彼が最善をつくして後世に遺したであらうところの業績であるのが公平である。

特にアッレー版を入れたのは、和譯の立場から云ふ時に、年代から云つても譯書普及の程度から云ふ時は、我國に於て重大な部分を占めて居るからである。

今日までに發行せられた和譯本で私が手に入れることの出来たものは六種ある。これを以上の分類によつて各類に屬する數を挙げれば、初版全譯二種、アッレー版全譯二種、正版抄譯一種、これに正版要略を和譯せるものが一種ある。この最後のものは、正しく云へばマルサス人口論譯ではないが、原著和譯に準ずべき歴史的に興味あるものとして假に加へたのである。別扱にする必要上これからはじめに論評することとする。

(註) アッレー版中アッレーの序文末尾にこの問題を取扱つた諸著が挙げられてある。又、經濟論叢第一卷第二號には河上博士の「マルサス人口論初版以下各版の差異なる有益な論文がある。同第二卷第五號同博士の論文参照。

二、和譯本の先驅

一、大島貞益譯、馬爾去斯人口論要略、全。明治十年一月出版、東洋社發兌、瀧本博士藏書)

これはマルサス原著書の和譯ではなく、本文の起頭に明記して英國無名氏抄約とあるやうに、正版を一部抄録し他は要略したものを更に和譯したのであるが、例へば第一編第一章及第二章の如く論述の中心にふれる箇所は正版原文そのまゝを採録してある所を考へると、その原文そのまゝの箇所だけに關する限りに於て翻譯に準ずるものと云ふことが出来る。恐らく和譯本の先驅であらう。

但、譯文には原文には付してある引用符がなく、又原文にも従つて譯文にもマルサス原著の章節には顧慮せずに記されてあるから、益々マルサスの著書の影が薄いわけである。

三十字詰十二行、四六半裁版百四十四頁、版權免許は九年十月五日付、例言は九年九月と日付してある。例言を掲げてマルサスを紹介し、本文をほぼ正版の順序によつて四節に別ち

人口増殖ノ利害ヲ總論ス

古今ノ例ヲ引テ之ヲ證ス

從來救解ノ方策皆宜ヲ得ザルヲ駁ス

救治ノ眞法ヲ論ズ

とあり、これに附録として「彌兒氏人口ノ説經濟論提要」を添えて居る。例言に曰く、

一……方今大ニ行ハル、所ノ人口論是ナリ是レ實ニ強當、斯密帖氏以來經濟學中ノ一大發明トス但々其書頗アル浩濬學者運ニ其端緒ヲ窮メ易カラザルヲ以テ憾ミトス余頃者會々一書ヲ友人ノ所ニ得共書題シテ「ソシアリスム」ト云即チ民間習俗ノ善惡得失ヲ論ズル者ニシテ其中馬氏ノ人口論ヲ抄節シテ之ヲ載ス余取テ之ヲ讀ムコト數回其抄略宜シキヲ得テ而シテ簡明記覽ニ便ナルコトヲ悦ブコト而シテ今夏幸ニ給告ノ暇アルヲ獲テ遂ニ其抄本ニ就テ此譯ヲ草スルニ至レリ……

一、得ル所ノ原書セト編者ノ名氏ヲ著ハサス唯題シテ英國某校醫學生某ト云フ蓋シ書中載スル所間々或ハ惡疾醜汚ノ事ニ涉ルヲ以テ故ラニ其名ヲ匿シテ之ヲ載セザルナリ……

譯者が底本として用ひた匿名の書とは新マルサス主義の聖書とまで云はれ歐洲の各國語に翻譯せられて同主義宣傳に重大なる役目を演じた The Elements of Social Science, or Physical, Sexual and Natural Religion. By a doctor of medicine, London 1834 (I. ed.) 匿名の著者はマルサス協會創立者 Charles Drysdale の弟 George Drysdale である。この譯出された部分は同書中の「人口法則」なる章下に掲げられてあるマルサス及ミル(J. S. Mill: Principles of Political Economy)の人口論を要約したものである。私の對比するに用ひたのは、原書が得られなうので佛譯、Elements de

Science sociale, etc., sixième éd., 1905 Pp. 197-237)であつたから譯文の價值を詮議するに由ないわけであるが、又それが出來たにしても外國語智識の黎明期にあつた當時の勞作を今日から回顧して公平に批評することは私には出來ないし、今日マルサスを學ぼうとする人々に格別の貢獻をすることにはならないであらう。

然し、その佛譯によつて又原文引用の部分については正版原文によつて對比して見た限りに於ては、大體に於て正確な翻譯であること明かである。然も其譯文に到つては初代翻譯者の勞作に共通の鏘鏘たる日本文であつて、文意明白、讀んで爽快を覺える。開卷、マルサス原文の第一編第一章起文の一節を譯して

凡ソ人事開進ノ理ヲ講スルニハ其法先ツ古來人間ノ康福ヲ妨ケタル禍源ヲ討察シ而シテ後其禍源ハ之ヲ根治スルヲ得ヘキ者ナルカ或ハ之ヲ輕クスルコトヲ得ヘキカ或ハ兩ナカラ之ヲ得ヘカラサルカヲ推究スルニ在リ

とし、第二章第六節に當る結婚延期によりて起る弊害を論ずる一節を譯して

今若シ此願慮ヲシテ獨リ此ニ止マリ諸種ノ惡事ヲ生セサラシメハ其害ハ人口抑制ノ諸害中ニ在テ尙至輕ナル者ト謂フヘシ何トナレハ是レ固ヨリ人倫天賦ノ一大婚欲ヲ禁スル者ニシテ其一時孤寂無聊ノ情懷深ク察スヘキ者アリト雖トモ之ヲ他ノ衆害ニ比スレハ尙大イニ輕重アレハナリ況ンヤ此類ノ無聊ハ凡テ永遠ノ計ノ爲メニ一時情欲ヲ抑フル者ノ常成ニシテ奔倫ノ致ニ於テ日々ニ服膺セサル可カラサルノ一事ナルニ於テチヤ

とせるあたり、其の常の文調である。Moral restraint, vice, misery の三語は慎戒、惡事、艱難と譯され(二三頁)である。明治初葉の早きに於てこの良譯によつて紹介されたマルサスの人口論はその點に於ては幸運だつたと云はれ得るであらう。たゞ、時代は人口論——殊に過剩を憂うるマルサスの人口論の爲に熟しては居らなかつた。因みに譯者大島氏は長命して東京附近に居住せられて居ることを最近聞いた。

三、アシレー版譯本

アシレー版はその扉題の示すやうに抄ではあるが兎に角全文マルサスの原文である。内容は三部に分たれ、第一部を「一七九八年の論文」と名づけ、原版の十九ヶ章中六ヶ章だけを載せ、第二部を「一八〇三年の論文」と名づけ、原版の四十八ヶ章中五ヶ章だけを載せ、各部相共に兩書の扉題を模してはじめに挿入し、序文、目次、みな原版の體裁に倣ふて入れられてある。第三部は一八〇七年第三版附録抄、一八一七年第五版序文抄、一八一七年第五版附録抄である。

アシレー版そのものの價値を論ずるのは其所でないから行はないことにする。たゞ巻頭にかゝげられた鑿指者の例言中の第一版及第二版の實際論について擧げられてある簡單な文献目録は内外のマルサス論者が偶然の暗合であるかの如く無斷で屢々擧げることのある程有益なものである。正版の和譯が今日の狀態である間は、この版の譯本は正版の總序とも云ふべき第二版序文及第二版原文の一部でも、一般人をして窺はしむる唯一の道である。その菊倍版の第二版は英本國に於ても稀觀書である。又、第三部に採録せられてあるものは悉く、今日現行して正版和譯本にも、又その底本となつて居る今日最も手に入れ易き Everyman's Library 版にも省かれて居るが故に珍重せられるであらう。但し、これらは第二版序文と共に、第二版原文程得難いものではない。これらは原

版の近年刊の諸版には採録されてあるからである。

アシレー版の和譯本には次の二種がある。

- 一、三上正毅譯著、マルサス人口論
但、扉題、「アツシレー博士抄略、米法學博士三上正毅解説、マルサス人口論」明治四十三年十二月、東京、日進堂發行、
- 二、鈴木政孝譯、マルサス人口論

(大正十三年三月、東京、聚英閣發行)

三上氏の譯本は表題には譯著、扉題には解説、本文の頭書には譯述、奥付には著作者とし、序文には「マルサスの著書を我國に紹介す」とあるけれど、卷頭六頁に亘る三上氏の自序を除いた部分については、著作と云ふより翻譯と云ふ方當れる覺へせしめるから、私の獨斷を以て、こゝに譯書であるかの如き取扱ひをすることに對して寛容を乞はねばならない。

菊判、百七十二頁、アシレー版の内容の殆んど全てを其順序通りに傳へて居る。もとより行文に自由な譯述であるから、純譯文にあるかの如き晦澁曖昧の語調文字殆んどなく、讀んで滯らず、一氣に章を終らしむるの概がある。達暢な文章は讀者の心を疲らせない。本書一讀、アシレーが傳へんと苦心したマルサスの精髓は譯述なる意味の制限内で遺憾なく傳へられて居るやうに思ふ。譯述書として考へれば成功せるものである。まづ何人も安心して讀めるマルサス人口論である。宜なる哉、明治四十三年末に初刷して以來、大正九年に到るまで六刷を賣りつくして居る。私が所有してゐるもの及び其他の機會において見ることの出來たものでは同年の第七刷が最も近い日付の發行にかゝるものであるが、恐らく其後も引續いて重刷されるだけの需要をうけて居るであらう。そして、もと抄録にかゝるアシレー版によるものであるにせよ、この譯書が其種々の制限の下にはあるが、此の早き年代に於てマルサスの人口論を傳へる爲に有效な働きをした功績は感謝すべきものであらねばならない。

自らには望んで而して達し得られないかも知れないところの多くの長所を有する本書に對して、私がなほこゝに蛇足を附して不足を訴へるのは決して徒に妄言を怡しむが爲ではない。細瑕を惜んで玉成を希ふが爲である。何となれば私は此譯書を以て小過を省みずして大要のみを傳へば足れりとなす啓蒙的のみなものと評價して満足したくないからである。希くばこれまでによく出來た本譯書がこれを買ふて讀むものに、學問的要求からしても、安んじて讀むに到らせたいからである。

本書の實質はたゞへ翻譯であつても、其の掲ぐる所の名稱が譯述であり、譯著であるとすれば、本書がアシレー版に比して修筆省略があつても、それは當然であらう。そして事實、譯者のその手際は甚だ巧妙であつて、原文と對比する時に頁を追ふて遭遇する省略(要略に非ず、一文一齣の省略)の箇所も、それによつて甚だしく原意を傷ふことなきは喜ぶべきである。例へば、本文以外にも、アシレー教授序文の末節、原文では七行に亘る所を省略することは其前半は英文に關するものであるから不要であり、其後半は第二版以後の修訂についての註であるから第二版の譯述を讀むに當つても有益ではあらうが必ずしも緊要ではない。又、アシレー原本にかゝげた第一版及第二版の扉題を省略することも亦、人口論「なる」一般に通用せる書名以上に詳細を知りたき讀者にとつては割愛ではあるが、何等積極的な蹉きにはならない。

然しながら、譯者がアシレー原本にありし兩版の總目次を省略して、これについて何等の説明を施さないで居ることは讀者に不親切である。原本に於ては、讀者は總目次によつて、如何なる章が抄録され又省略された章が如何なる論を取扱つたかを漠然ながら察知して抄録されてる各章の間にある連絡を索め得たのであつた。殊に甚だしいのは第二部、第二版よりの抄録には、第一部に於ける抄録に於て抄録の序次によつて付せられた章の序數以外に原文何章と割弧内の註ありたるを異り、單に抄録せられた各章を配列の序次によつて第何章と稱して居るが爲、第一編第一章及第二章はそのまゝ第一章第二章となつて居るのは可として、第四編第一、第二、第十章が各々單に第三章第四章、第五章となつて居るだけで何等の説明がなきは正に讀者の判斷を混亂せしめる。たゞアシレー

1の序文に、第一版よりは約其三分の一、第二版よりは約二十分の一を収録せり、と云つてゐるから、収録されて居るのが全體の幾分であるかを知ることが出来るであらう。けれども果してそれで充分であらうか。

又、第三部に於ける本文は三編とも抄文であつて、アッレー版には目次にも文題にも一々 Passages from 乃至 From なる文字を前置し、省略した場所には點線をひいて空字の標示をしてあるけれども、譯文には何れにもそれは示されて居ない。殊に第五版序文抄の如きは全體の五分の一にもたざらざる二齣を収録して居るのみであつて、これだけを讀んでこれを全文であると思はせられる讀者は最後の訂正を経たりと云はれる第五版の序文としては甚だ奇異であるとの印象を得るであらう。これらは誤解を招く覺悟なくして敢行し難い省略である。同じやうな抄略標示無視は第二部第三章、第四章、第五章にもあり、第一部第三章にもある。

本書が解説であり著作でありと云ふ以上、之を原本と對照して叙述の異なることがあるからと云つて誤譯云々を論ずることは出来ないとしても、原書の意味する處と異なるものを傳へる文章あるに至つてはその責を免ることは出来ない。以下綿密に原文と對比して私の注意にふれた箇所を列擧して公平の批判に供する。日本數字の頁數行數は譯書に關係し、括弧内の數字は原書の頁數を示す。

九頁 一。永遠に。「はゞ現狀に」原文にある (p. 9)。彼の人口論の根本公理たるこの二大前提の一つの中でのこの譯語はマルサスを距ること甚しい。

一三頁 一。解題。人類の生存に關する從來の思想を此三箇の命題より推論し得たる結果相同からず。 The different states in which mankind have been known to exist proposed to be examined with reference to these three propositions (p. 9)。論文の内容に對しては肯定と否定との顛倒である。

三一頁 八。戀愛を満足せしむることは勿論或人々に取っては是より生ずる凡ての苦痛を相殺して尙ほ餘りあるものなるべしと雖も、斯の如き結婚の結果は多く先見的制限の思慮あるものゝ取るべき方法なることを證據立つるに過ぎざるなり。

and it would be hard indeed if the gratification of so delightful a passion as virtuous love, did not sometimes more than counterbalance all its attendant evils. But I fear it must be owned, that the more general consequences of such marriages are rather calculated to justify, than to repress, the forbodings of the prudent (p. 21)。反マルサ斯的譯文である。高野博士、大内教授共譯の初版和譯(後節詳論)六二頁以下にある譯文を推す。

三七頁 一。早熟。are a long while arriving at maturity (p. 25) 意味反對むしろ「晩熟」なるべし。

三七頁 一五。不時の災厄に逢ふて困窮せるもの。the frequent distress (p. 25) 「常時」であらう、この些細な文字の差で救貧法に對する態度に大變動を來らせる。

四四頁 一。救濟院内に於ける貧民の生活にして、其外にある貧民の夫れに優るが如き。 If the poor in the workhouse were to live better than they now do (p. 30) 「…現在の程度より高くなるが如き」

四九頁 一四。其施行法。the whole business of settlements (p. 34) 同頁 一五。費用を徵收。 parish persecution(do)。この二箇の誤譯は「」に「其施行法」と譯出されたりと覺ゆる settlements なる制度に對する見解から起つてゐる。それは「定住居所」とも云ふべきが、要救助者扶養の負擔の教區を決定する爲の法律的基礎である。勿論費用を徵收などとはありやうとならぬ。

五六頁 一。或國に於ては人口は既に壓迫を受けつゝあり。 In some countries population seems to have been forced(p. 40)。「或國に於ては人口増加は強制的に行はれたるが如し」。

八四頁 一。然るに一方には此社會に於て卓越の地位を得んことを希望するは是れ人間固有の性情なるが、道徳上の優秀を以て儕輩に擯んでんことは頗る困難のことにして何人も容易に企及し得べきことにあらず。是に於てか剩餘の生産物を有するものは是を以て何等か社會に於ける己が地位と名聲を高むるの方法に用ゐんことを希望するは自然の結果にして、其何人も先づ心に浮ぶは他の食物の缺乏に苦み、且つ自ら勞働せんことを意とせざる人々を使役して更に多くの生産を得、其財産を増加せんとするは是なり。 Moral merit is a very difficult distinguishing criterion, except in extreme cases. The owners of surplus produce would in general seek some more obvious mark of distinction. And it seems both natural and just, that

except upon particular occasions, their choice should fall upon those who were able, and professed themselves willing, to exert their strength in procuring a further surplus produce (p. 67). これに相當する譯文 高野博士本、一八八 以下參照。九一頁——。余は前論の主張の動がす入からざることを感ずると同時に、幾多不備の點ありて、増補を要することの大なるを發見せり。I found that much more had been done than I had been aware of when I first published the essay (p. 68). 第二版序の一節、正版の筆をさるに到りし動機を表す要句。「其研究に取懸るや、余は前論出版の當時氣づかざりし更に多くの研究の行はれありしを知れり」。

一六頁——九。正當に結婚するも其結果を避けんとすること。
もしこの譯語が violations of the marriage bed (p. 90.) に當るものとすれば「姦通」である。然し問題は單なる誤譯ではない。この譯語がそのまま讀まれるとすれば、マルサスが避妊による産兒調節を知りたりや否やは問題にならない程明かな筈である。

一四五頁——二。余が今日食はんを欲する一片の羊肉は是を營々として勞働に従事しつつ、更に肉食を試むる能はざる貧民に施與する方大なる效用あることは論を俟たず。されば是に由りて世間一般の貧者を満足せしむることを得ば、余も雖も、敢て是を斷行するを辭せざるべけれども、理論の上より云ふも、實際の經驗に徴するも、斯の如きことを要求するの權利を貧民に與ふるの結果は到底各人に満足を得ざるのみならず、人類全體をして非常の悲境に沈淪せしめずんば止まざるなり。

前後意味を逆ざる曲解である。原文は pp. 113-114 に亘る長文であつて、これはその省略譯であるから原文は省く。正しい意は——「自分が今日食はうとする肉は肉の味にかつた勞働者飽食を知らない貧民が用ゐては有難かられないと云ふ譯ではないが然しさう云ひ出した日には如何に供給が豊富でも、結局は充分な満足を得ることが出来ないし、きりが無い。遂には人類全體が窮乏に沈淪するに到るであらう」と云ふのである。

以上は論文の意味の理解をさへも妨げると考へられた主な個所のみを摘出したのであるが、更に蛇足を付すれば、コンドローセト(七頁)はコンドルセーに、corn を「雜穀」(六一頁)とせるを「麥」に、industry を一様に「産業」とせず六一頁、一〇八頁の如き場合には「勤勉」に、paid in land(p. 119)「土地を以て賃金を支拂はれ」(一五二頁)は「農産物にて……」に、最後に an early attachment to one woman (pp. 9, 80-81, 51)を含む句に於て二版に屬する譯文には折角正しく「一夫一婦相愛するは是れ人生の自然より出づるものにして、又た自然に早婚に傾く……」(一〇四頁)と云ひながら同一文の初版に屬する部に於ては「古くより一夫一婦の制度を守れる……」とて early の二様の解釋をやめて正しき前者の譯(七二頁)にもありに訂正したく考へる。更に二三三頁より一三四頁に亘る、アーサー・ヤングの救貧策の内容を三ヶ條に分つて列擧する引用文中、一三三頁、六行目「三人以上の子女」、一一行目「一週一志」、一二行目「共有地の二分の一若くは三分の一」、一三四頁一行目「三人以上の子女」、四行目「幾志かの補助」に當る原文は各順次に having children; paying shillings a week; one of the extent of the common; having children; demand shillings per week; (p. 103-104)

の如く譯文の數字に當る處は空字となつて居て「三人以上」「一志」「二分の一若くは三分の一」「三人以上」「幾志」等の補字は此譯本獨特である。これはアシレー版のみが空字にしてあるのでなく、原版は勿論、エプソマン叢書版 獨譯、佛譯、及佐久間氏和譯本(後出)にも忠實に空字にしてある。マルサスが引用したヤング著の小冊子 The Question of Scarcity plainly stated and Remedies considered, London 1800. にはさうあるか、同書を探したけれど得られなかつたので、わからなかつた。同書乃至は他の註解書によつてこれら空字が譯文の如く表はし得るものであるのであつたなら、評者は謹んで譯者の教を乞ふ次第である。

鈴木政孝氏の譯本は明に翻譯である。随つてよく逐語的に原著を追ふて居る。第一版及第二版の扉題がなく、第三部の論文の題にも目録中の題にも抄録なる斷り書がない點、三上氏のご同様であるが、アシレーが親切を以て附してくれた原本の總目録を附録として別に譯出してある。文中アシレー

1版に於て省略されたことを表はしてある箇所には二三の場合を除いては、中略乃至後略、と表はされて居る。註も一々アシレーの取つた體裁によつて譯されて居る。序文には日付まで譯されて居る。其形式に於て又意圖に於て忠實なる翻譯らしく思はれる。三上氏の譯書出て十五年を経て現はれたことだけを見ても、三上氏の譯書の聲價と競争する覺悟で、又既存譯の傍に於て存在の意義を有すこの意氣込で出たのであらうと考へても、より優れた翻譯であることが豫想される。第二人目の譯者は既存譯を利用して教を得ることの特權さへある。

然しながら、あらゆる形式上の努力も、譯者の意圖も、好都合な環境も、當然なる期待も、愈々其譯書の實績を検した時に全く徒らなつてしまつた。

譯文が生硬である。文意が晦澁である。字句が原文の思想の順序には結びつけられてはあつたが文章がない。一體、譯文は一つの文章である。故にそれが文章としての素質を持つて居ないならば譯文が存在しないことになる。悪文は譯文の場合でも致命的である。他の如何なる素質も文章と云ふ範圍内では無効になつてしまふ。譯者は此譯文を以てしては其所期したる如くマルサスを國民に紹介することは出来ない。

悪文の背後に夥しき誤譯がある。其誤譯はマルサス人口論に關する學問的素養の缺如、語學力の不足、不注意等から起る種類のものである。開卷第一頁、第一版緒言の譯に於てゴドウィンの *Enquirer* を雜誌であると云つて居る。明瞭を明良と云ひ、*a topic so generally interesting* を「一般に爽快なる問題」と云ひ、「たとへば一般的な微かな光でも」とある *to every, the least light* を「個々最少の光明が」と云つて居る。第二頁で *impudent* を「厚顔」と譯したのは *impudent* を取違へたのであらう。

この譯書でマルサス人口論を知らうとするならば無理である。マルサスの風格を偲び味はわうとするならば更に危険である。同一のアシレー版について三上氏の、より優れた譯本がある以上、この譯書による必要はないのであるから、従つて夥しき誤譯を指摘して行く必要もない。

四、初版譯本

正版が初版から見て同一書の改訂と云ふより新著述であつて(第二版序文中の一節、三上氏譯九三頁)、人口論著としての正版は初版の補足を必要とせざる獨立の一箇完成せる書物であり、「屢々第一版を参照するの勞を省かしめんがため」の注意を以て記されてある(同頁)。然らば今もしその五倍に近い字數を内容とする第六版の全譯が現はれるとすれば、初版譯本はこれと比肩して如何なる價値を保つて行くであらうか。マルサス人口論そのものの全斑を知る爲には初版は正版に數歩を譲らなければならぬのは勿論である。と共に、然しながら、簡明直截が初版の長所である。此の長所は一面過激辛辣な筆致となり尠からず誤解反動を惹起したけれど、又それ程にも初版の武器であつた。そして初版を成功せしめたこの武器は亦正版成功の動力でもあつて遂にマルサスをして名をなしためたところのものである。正版は怠屈であり初版は躍動的であり、マルサスは初版の故に成功したのであるとの評は蓋し蕪言ではあるまい。(註一)

簡明であるが故に概觀的に彼の論を知らんとする者には適當である。又、多忙な讀者を他かきめない役を勤めるであらう。他かきめないと云へば、初版の文章は時事を慨して起つた時潮警勵の言であるが故に全文潑刺たる生氣に満ちて居る。直截であるが故に印象は明瞭である。それは行く處まで行かせて見たマルサス説の姿である。

マルサス説の原始の形と動機とを詳かにし且其れによつてその發展形成の沿革を知らんとするも

のに取つて初版は有用である。殊に當時の問題を歴史的傍光によつて見る上にも興味が多い。第一版にあつて第二版に採録しない部分があるのは後者が性質上純學問上の著述であるからであつて、著者が其價值なきを信じたがためではない。是等の部分が第二版上梓以後猶ほ讀者に取つて思考を要すべき必要の事項であることはマルサス自身少しも疑ふ所でないのである(三上氏譯本、九四頁)。然しながら、以上の諸點にまさつて、初版そのものの價值による以上に、初版の和譯を有意義ならしめるものは、原版が稀覯本であると云ふ事實である。一七九八年、倫敦ジョンソン書房發行の原本は重刷本が出されない爲に流布數少なく河上博士の説によれば今日は非常に珍本とされ菊版三百九十六頁の書が時價百圓以上を以てしては容易に入手し難い(谷口氏初版譯後段詳説、序、三頁)とのことである。但し、私の用ひたものは大正九年、丸善取次賣價七拾圓たらずではあつた。原本が珍本であるばかりではない。それは少くとも佛獨語にも翻譯されなかつたらしい。アシーレーが舉げた Hegewisch の獨譯 Versuch über die Bedingungen und die Folgen der Volksmehrung, 2 Teile, Altona 1807 (unvollständige Übersetzung) は第三版譯であり、も一〇の Prévost の千八百九年のフランス譯も其表題 Essai sur le principe de population, ou Recherches sur l'influence de ce principe sur le bonheur de l'espace humaine dans les temps anciens et modernes, suivi des moyens propres à adoucir les maux dont ce même principe:によれば初版からのものではならざらう。Petite bibliothèque économique 中のマルサス人口論佛譯の書目に掲げられた一八九〇年(註二)以前の四種の佛譯は悉く正版からのものである(註三)。今かゝる珍本が二種までも和譯されて居ることは學界の爲に寔に喜ばしきことである。この意味において初版の和譯は、他の一般の翻譯の如く原書を讀むだけの語學力なき者を原書に親しましめるばかりでなく、この珍本を重刷してたやすく讀書人の手に入ることを

得せしめた、價值あり興味あると共に重大なる責任ある仕事と云はねばならない。それと共に、私も亦、原書の流布稀なる書の翻譯は一般世人に原書對照批評の自由を與へないから、幸にして原書に接する機會を持つ少數特定者が負はされて、批評紹介の價值及責任の大なることを痛感して居る。

初版の和譯二種とは次に記すものである。

- 一、谷口吉彦譯、マルサス人口論(大正十二年、京都、弘文堂發行)
- 二、高野岩三郎、大内兵衛、共譯、マルサス人口原理に關する一論(大正十三年、東京、同人社發行)

、谷口學士の譯書は書名を表題では右の如く世人熟知のものを以てし、扉題に至つて詳細に原書名を譯出して「人口の原理に關する一論。其が社會の將來の改善に及ぼす影響。附り、ゴドウィン氏、コンドルハセー氏及其他の著作者の思索に關する評論」とし、其裏には原語にて原著の扉のまゝを模し、開卷と共に譯出の忠實と思はしむ。全譯である。註までをも忠實に譯出した全譯である。マルサスの著書のどれもが全譯されたはじめての勞作である。譯文の他に、河上博士の序、マルサスの肖像及筆蹟、附録として譯者の研究にかゝる「マルサスの小傳及論著」がある。本文中に所々親切な譯者註を附してくれた。譯者の態度は忠實なる原書複製者として終始した。其注意は綿密である。一字一句をも現はし盡して餘さざらんことを努めたやうに思へる。原書の頁數が譯文の龜頭に記されてゐることは其の態度の表はれであり、原書頁の引照に出會つた時原書を手にするに容易ならざるかゝる珍本の譯書として感謝すべき懇なる心付きである。私は熱心に且敬意を以て精密に原書に對照しつゝ譯書を讀んだ。勿論誤譯と思はれるものがあつたことは比較的小事である。大體に於てマルサスの主張はわかるやうである。彼の論法も忠實に現はされて居る。私は恐らく本書を以て初

版を我國に傳へるものとして推賞し、譯者に感謝すると共に、微瑕を検訂して完璧を企て、以て譯者と共に本譯書流布の責任を分つたであらう——もしも、こゝに本譯書より優れたものが出現しなかつたならば、私は高野博士及大内教授共譯書を意味する。それは、今まで事實上の最善であつたものが、より優れたものとの出現によつて劣位に貶されるに到つただけのことだ。

谷口學士の譯文は、一の文章として讀解するに決して樂でない。所謂生硬と云ふべきか、忠實たらんとするのあまり文章の生命を養ふことを忘れたと云ふべきか、それは讀んで疲勞を覺えせしめる。霸氣縱横文意暢達のマルサスの原文を髣髴せしめるには多大の距離がある。譯字の不熟なこともこの缺點を擴大した、そしてそれは一部は日本語彙の不足にもよるのであらうけれども、其部分を除いては、原語字句の狭き理解によるものと考へられる。原語字句の意義の狭き理解は一方に不熟なる譯語を生み其甚だしきに及んで誤譯を生むからである。さきに誤譯を小事なりと云つたのは、比較的のことであつた。文章の生命の有無に比すれば、誤譯、正譯の如きはより輕き問題であると云つたのである。譯文は何よりも先に文章であるからである。その限りに於いて誤譯の重大なることを考へる。譯者の譯文は尠ならず發見せられる誤譯によつて一層讀者に難讀を強ひて誤解の陥穽に入れしめる。

よりよきものが現はれたが爲に顧みられまいと考へられるものの缺點を公に指摘するのは批評の爲に批評を好む行爲として誹られるかも知れない。然し、私はこの譯書が顧みられまいとの私の判斷に盲目的に服さないであらうところの人々の爲に、極めて僅の例を用ひてそれを示さうと思ふ。この譯文が讀んで疲勞を覺える事を示す爲に、偶々ある短き一文章を以てすることは不公平たるを免れないであらうから試みないことにする。生硬なる譯語については「その主張全體を説明する

ため……」をせられるべき in the elucidation of the general argument を「其の一般的議論の解説に於ける……」(二頁)とするが如き種類のもの、philosophy を「哲學」(六、九、十二頁其他)と譯し、mind を「知力」(六頁其他)、pure and simple manners を「純粹且つ單純なる民俗」(一八頁)、cause of truth を「真理の根據」(四、五頁)、writer を「著作者」(三、九、十一頁其他)とする種類のものがある。序言の中だけで、頭初の「其議論は、社會の將來の改善に關する 般の問題を以て始まつた」は「……問題を提出するに到つた」とすべしもので stated の誤譯に原因する因果顛倒である。序言二頁「企てるものであるから」は as a contemplate との誤譯、意味をなさない。同所「引き下げられねば」では受動的運動の状態を意味し、be kept down ならば引き下げられて居る靜止状態であらねばならぬ。Plain statement は「平易」でなく「平明」に示すことである。更に其他には natural philosophy を「自然哲學」(一頁)、only the better to enable them to を「せしむるに都合よき」(三頁)となして不定法の因果の表示の錯倒を行ひ、civil society を「文明社會」(四頁)、forcible point of view を「有力なる見解」(七頁)、「怠慢」を neglect を「不注意」(八頁)とする等の些々たるより、years of plenty, or years of scarcity を「年々の潤澤若しくは年々の窮乏」(三二頁)、droves of cattle を「追ひ來る家畜」(五〇頁)、footman を「軍人」(五四頁)、generate を「一般化する」(七九頁)、「傳染病」をすべし contagious disorders を「傳染的の(秩序)紊亂」(一四一、三三〇頁)、「空籤」を「白紙」(一八三頁)の如きに到るまで夥しく散在する。譯者には population に act of populating, or increasing in number の意味のあるのが判らないらしい。The Cape に對して「(喜望)岬」(三七頁)と遠慮して括弧の中へ入れた註釋的釋語を附して居る。然もこゝに示した些々たる誤譯なるものが、如何に僅々數頁の中にあるかを見れば、こゝに例示する邊のない構文及單語が他所に多いことが窺はれるであらう。

多くの缺點を以てしても、本書が初版譯出の最初のものとして功績を認められ、他の譯の出るまで多くの好學者の要求を充して來たと思ふ。十二年三月末に世に出てからその五月には忽ち再刷さへも行はれた。そして今日も依然として廣く讀まれてるやうに見える。但し其價值が河上博士の序のあること、更に其序に於て、一讀すらもなまなかつた博士の「この譯本の必ず信頼するに足るであらうことを期待する」この折紙があり、一般讀書士が其折紙の眞なりや否やを知るに由なきが爲に非ずんば學問及讀書界にとつて幸である。

高野博士、大内教授共譯本は種々の意味に於て感興をそゝるものである。我國の不幸なる習慣として翻譯は學問的聲價の定まらざる少壯學者又は特志の好事家の手に委せられ、既に自己の業績を以て學界に貢獻をなした、ある人々に顧みられない傾向があつた。高野博士は我國經濟學及統計學の大家であり、殊に人口問題については先覺である。大内教授も亦經濟學社會問題について其令名東大の内外に高き學者である。そしてこの共譯は名義上の共譯ではなく、其序によれば「稿を起して四年、原稿が共譯者の手を幾度か往復しつゝ、」云々である。譯者は又、同じ初版に對して谷口學士が譯本が出たのを知り、之を檢讀して、而して猶別に新にこの譯本が現はれることの意義あるを感じて出版を敢行した。アシレー版の場合にも鈴木氏の譯本の出る久しい以前に三上氏のそれが在つてつゞいて流布されては居たが譯者自身がそれを知つて居て敢て出版を行つたか否かは明かではなかつたが、この譯本の場合にはこの事情は明かである。而してこの事情の明かであることは出版にあつて譯者の眉宇に現はれたであらうところの自信と緊張の度を窺はしめる。

譯者の採れる根本方針は原著への忠實と讀み良き邦文との二つである。忠實の點に於て、此の譯本は表題にまで初版正版を通じて用ひられた書題を逐語に譯出して掲げた唯一の和譯書である。こ

の名稱は谷口氏によつて既に考へられた。けれどもそれは熟慮の結果扉題だけにどゞめられ表題には従前の名稱が用ひられたのであつた。表題の外は谷口氏の手法の如く、扉題には永き副題をも沿えたる本を掲げ、原書扉題は寫眞版で表はされてゐる。

これらは些事と云はゞ些事であらう。本文は谷口學士の譯文に於ける態度と同様、原書の一字一句をもゆるがせにせざる全譯であり忠實なる逐字譯である。人名、書名の新しく出るものには一々原語を添えた程譯者は専門的研究者でもが譯書を讀む時に感ずる固有名詞についての不安に深い同情を持つてゐる。しかもこの逐次譯は同時に流暢なる且魅力ある名文である。私がこの譯書を讀んで第一に感じたことは私にはこれだけの優れた譯文は書けないであらうこのことである。讀んでよく判るばかりでない。讀んで爽快を感じさせる。マルサスが其燃えるやうな熱心を何人にも耳を傾けやうとする寛容の中に包んで辭にしかも暖く、人心の暗黒を明かにすべく眞理の炬火をかざした時に豫期したであらうやうな當時原著の讀者の感激が、この譯書を讀了することによつてはのかにも感ぜられる。私はかゝる良譯によつて、今まで大部分の人々が接することの出来なかつた、或は難澁であつた、有名なしかし誤解されがちであつたマルサス説の精神が、間違のない感激と正しい理解の中に我國民に傳へられるやうになつたことを喜ぶものである。

勿論この譯書のすぐれてゐることは、譯者が別の譯本が既に公にされてたこと知つてながら出した意氣込を考へても當然であるが、それ以上當然なことは、この譯者は以前からあつた譯本によつて多くの教示を得た筈である。題名及扉の體裁、本文の配置、原書頁數の書入れについても、其他原文の解釋、譯字の選擇についてもよき手本があつたわけである。同等の能力と熱心とを以てしても後のものがさきのものに優るべき理由は明瞭にある。もしも遅れた譯者がさきの者の勞作に眼も

くれず、全くこれに求める所なく全く獨立に行つたとすれば、利用し得べかりし機會を不要なりとし
て棄てた廉によつて、忠實謙遜なる譯者としては過失である。同じやうな長所が兩書において偶然
の場合によつたとしても少くも後の者はさきの者を倣ふことの出来る地位に居たのは事實である。
然し、この場合の事實を云へば、この共譯者は、少くとも大して注意深くは舊譯本を見なかつたら
しい、従つて之を利用し盡さなかつたらしい。何故ならば舊譯に於て正しく譯されてゐながら新譯
には立派に誤譯してゐる處が尠なからずあるからである。

然しそれはそれである。舊譯本が新譯本にどの位の利益を與へ、したがつて新譯者の能力と名譽と
がどれ程まで割引されなければならなくてもそれは些事である。私共は、とまれよき譯本を求めて
る。よき譯本であればよいのである。そしてこの新譯本はまことによき譯本である。私はマルサス
の初版を我國民にこの譯本によつて推薦することの責任をとる。そしてかやうな責任をとる場合に
は當然許さるべき若干の條件を提出せんとするものである。それは消極的批評の精神を以て行ふも
のではない。批評中に摘發しないですまされる他の一切の部分について譯者と共に連帶の責任をと
らんとする評者の積極的使命に重心を置いた條件である。そしてその條件として次に列擧する點に
ついて譯を正しく或は差支なしとし、或は評者を正しとするは一に讀者の自由判斷にまかせる。勿
論、譯者と評者との立場及性格の相違がある以上、譯文の微細にまでも及ぶなら、譯字の選擇用法
について論ずる所盡きないであらう。評者はかゝる仕事は負はされてゐない。こゝに指摘するもの
は明かに誤りと考へられるところのもののみである。これらのあるものは事實解釋の誤り、或は原
文解釋の誤りと考へられるものを原因とし、何れも原文の意味と異り或はこれを不明ならしめて居
るものを、讀者の引照上の便宜上、頁の順を追ふて各項、譯文、原文を掲げ、要すればこれに私見

を附す。行頭の頁數は譯本页數である。其下の數は行數。原著頁數は譯本について知り得るからこ
ゝには省く。

序文二頁—八。見解。view 「觀察」の意。

同一十。レベル以下にして置。be kept down to the level 「以下」と云ふ意味はない。同位の觀念である。「レベルに
下げて置く」をさへある。

序文四頁—八。理論上だけならば。even in theory ……だけでも。

一頁—一。自然に關する學問。natural philosophy 物理學。

九頁—二。従つて私にはこの理由が解らない、否、恐らくは何人にも同様解からないからであらう。To my understanding, and
probably to that of most others, the difficulty appears insurmountable この文 the difficulty をサンゼマシトとして論ず。

一〇頁—二。毎月。daily 誤植か。

三一頁—四。起つた。does exist 「在る」

三五頁—六。制限する。prevent 「防ぐ」

同一八。この眞理。the truth of this position 「この論の正しいこと」である。

三六頁—五。次に人口増加と云ふ優勢な力を制限すれば、そこには必ず窮乏と惡徳とが生れる。人生の盃に於けるこの苦味
一盞と、之を生ぜしむに至つたと思はれる物理的諸因の永續については、吾人はそれを疑ふべく、あまりに有力なる證據を
有らざるを以て。And, that the superior power of population cannot be checked, without producing misery or vice, the
ample portion of these too bitter ingredients in the cup of human life, and the continuance of the physical causes that
seem to have produced them, bear too convincing a testimony. 譯文の第一文は正しいが後半が混亂して居る。第一文につ
いて意譯すれば「人生盃ひ多く其原因亦肉身の内にあるを懐へば此事あるべきは明かであつて疑ふ餘地がない」となる。

三八頁—一。解題。牧畜國家。state 「状態」。

四〇頁—八。女子は、轉々場所を變へる爲めに起る不便と障害との爲に、又彼等の殘虐な主人を迎へるために種々の用意を
せなければならぬ雜役に追はれるために、而して又そんな事をしてはならないと云はれるまゝに子供に對する必要な注意

などは全然之をしないのである。this necessary attention the women cannot give; condemned as they are, to the inconveniences and hardship of frequent change of place, and to the constant and unremitting drudgery of preparing every thing for the reception of their tyrannic lords. 譯文は「悲慘な生活を送る運命に縛られてゐるのであるのを改めて」子供に對する……として、……雜役に追はれるに……けて「悲慘な生活を送る運命に縛られてゐるのであるのを改めて」子供に對する……として、……

四三頁—アシアの。Seythian 一部に於てアシアに關係はあるが、歴史上のこの事實の場合には不適當である。或はシシアの、と、アシアの、との誤植か。

四六頁—九。人口増加の力によつて得る所のものよりも大きかつた。was more than supplied by the mighty power of population 譯文は反對の……を云つてゐる。人命の損傷は如何に激しくても人口増加の力は之を補ふてあまりがあつた、と解さなければ、第一マルサスの論據が立たない。

四七頁—四行。石油。油又は油脂とすべきであらう。未開人が石油を追ふて行くにマルサスが書いたと思はせてはマルサスをあまりに無學にしてしまふ。

四九頁—四行。殺戮。殺戮と掠奪とを間違へることは單に文學上の些事ではなく、人口論的に見れば火と水の如き兩極端の反對を間違へたことになる。

五一頁—解題。の位稠密。much more populous 「より稠密」

六二頁—二。社會。society 「社交」

六五頁—七。生活に樂しき夕。a happy evening to their lives 「生活」ではなく「生涯」、「夕」とは老年を意味する。

七〇頁—八及十。即ち……あれば。or even if 「もしも」は「假に……」

七一頁—七。五片又は六片。from six pence or seven pence

七九頁—六。獨立の出來ぬ貧民を……も耻づべき状態の……に……置くのは、個々の場合について見れば、殘酷な……には相違ない。Hard as it may appear in individual instances, dependent poverty ought to be held disgraceful. 譯文は修辭上反對を表はしてゐる。個々の場合について見れば氣の毒ではあるが、施與で生活するのは恥辱であるを心得させる必要がある。

あるだ。

八六頁—四。貧民合宿會。settlements 救貧法に於て貧民が一定の教區より救濟を受ける資格を發生せしむる法律上の條件。「定住居所」と云つて居る。

同—八。強請して合宿會に入らしめるもの。parish persecution 「教會區の迫害」(佐久間氏正版譯一三四頁)

同—十一。その緩和策なるものが今の事情を許すものでなければならぬとするならば。pallatives are all that the nature of the case will admit 假定文ではなく概括的假定文である。「一體緩和策……ものは時の事情の許す限りのものである」九二頁—八。可能なこと。否或種の有益な事をも犠牲にしてゐる。sacrifice not only possible, but certain benefits 「見込のあること云ふばかりでなく確かにうけられる利益さへも犠牲にしてゐる」

同—九。吾等は庶民諸君に告げやう、諸君がこの暴虐な規則に服従するならば諸君は缺乏を免れる。故に諸君は之等の規則に服従するを。We tell the common people, that if they will submit to a code of tyrannical regulations, they shall never be in want. They do submit to these regulations. 譯文の「告げやう」の意味や「服従する」とするの假定の意は原文にはない。兩者共に現在の断定である。「……も舉げてゐる」及「規則を遵守してゐる」である。

九五頁—六。更により多く彼等自身のために。for themselves as well as 「まけずに」位。

九七頁—五。貸與。gratiable 下附される。

一〇二頁—四。バラチン族。the Palatine 云々まづもなく獨乙帝國の選舉候補。

一〇四頁—一。清潔法。cleanliness 單に「清潔」

同—二。かも知れぬ。seems 「……だ」

一〇八頁—六。ブランデンブルク、ノイマルク市。Neumark of Brandenburg ノイマルクは都市ではなく、「新邊疆伯領」の意。

一一三頁—八。三期。two periods

一二五頁—五。其他、穀産國。corn countries

一二六頁—一。國民の老若。its youth, or its age 「國の新古」

一二九頁—九。若しも人類の平等が實現されるならば。if they were equal すると平等でない今日は然らざるやと疑問が起

- る。たゞ人類が平等であつても……」
- 一四二頁——解題其他。有機的。organic「肉體上の」或は「肉體の」
- 同——四。社會組織。organization「人體の組織」
- 一四三頁——三。物理學的。physical「生理の」
- 同——四。傳染的又は遺傳的惡癖。transmissible and contagious disorders「傳染病」
- 一四七頁——一。明日。月が地球を衝突すると云ふ断定と、太陽が一定の時間に出ると云ふ言明とは共に正當であると同時に、又共に矛盾した不合理なものだと云ふものになつて仕舞ふのである。and think it as unreasonable to be contradicted, in affirming that the moon will come in contact with the earth to-morrow, as saying, that the sun will rise at its usual time. この二つの断定の何れに反對するものと同じやうに不合理だと考へるやうになつて仕舞ふのである」
- 一四八頁——一。變性。degeneration 肉體上の完成性 (organic perfectibility) に對し「退化」を云ひたし。
- 一七六頁——五。最も惡性の人の最初の罪。the original sin of the worst man「最悪人の原罪」。原罪はキリスト教の成語、アダムに由來する先天的罪業。以下ギリメテ、教的用語多し。
- 一八五頁——十一。男子は、the men「人々は」をさす。男女對立を論じてゐるのではないから。
- 一八七頁——六。女性の從順の美德。female delicacy「淑徳」
- 二〇三頁——六、七。悪い機嫌。心配したまらぬ様な出來事。distemper, a source of disease 何れも「病氣」
- 二〇四頁——三。激怒。anguish「苦悶」
- 二〇八頁——三。途上一群の犬が現れて吠えくると、馬は最初出立したときの様に元氣に勇ましくなるかも知れぬ。この時に犬を追拂ふ。The cry of a pack of hounds will make some horses, after a journey of forty miles on the road, appear as fresh and as lively, as when they first set out. Were they then to be hunted,「獵犬の群が吠え立てると……」を續き、後の文に移つて「そんな時、馬を狩り立てに使ひまわしても……」を假定文。
- 二二二頁——十二。永久の。原文になし。除くを要す。永久の眠りを云へば死を意味すべけれど、原文は單に睡眠を意味す。
- 二二六頁——五。四十年。four thousand years 誤植ならん。
- 同——九。永久進動器。a perpetual motion「永久運動」
- 二三二頁——三。混然。「渾然」ならん。
- 同——十一。真空管中。in vacuo 管を云ふ意なし。
- 二三五頁——九。これには、多少とも人間刑罰の眞目的に資する點があることを疑ふ譯には行かぬ。one has little more to do with the real object of human punishments, than the other.「兩者何れも人間刑罰の眞目的にはあまりかゝりがないのである」
- 二三六頁——九。抑制。restraint「監禁」
- 二四四頁——解題。支持命題。propositions (respecting…) not established「支持されない命題」
- 二四六頁——三。胚種が動き出した。the germ… was animated「胚種が生活體となつた」
- 二五二頁——十。人造肥料。the forcing manure マルサスの時代であるが故に「人造肥料」はあかしい。文字通り「促成の爲の施肥」
- 二六三頁——七。自然律。the inevitable laws of our nature「自然」でなく「本性」。「人間の本性に關する必然法」
- 二六四頁——一。一切の事物を作り出した一切の天才の貴き努力も。for all the noblest exertions of human genius,…… for every thing「作り出した」の下へ「もの及び」を挿入して形容形關係を切らねばならぬ。
- 二七〇頁——二。その列車に乗つて。came in their train 此時代列車はまだ存在しなかつた。「あまに」を云つて
- 二八一頁——十。年蓄財。yearly stock「年産額」
- 二九八頁——解題。個人的には生産的ではあるが、國家的にはさうでない。productive to individuals, though not to the state 文意の中心が肯定に來なければならぬ。「國家にはさうでないが、個人には……」
- 三〇三頁——十。だけで分け合つて。depriving「から奪ひ合つて」
- 三〇四頁——二。掠奪。privation「難澁」
- 三〇五頁——九。定義によれば。これは副詞的制限でなく、定義による國富の「形容詞的制限」に用ひたし。
- 三〇七頁——四。Observationを Observations に
- 同——五。死亡表。the probabilities of life「壽命公算」。一三四頁には、「生命の『確ラシサ』」を譯してある。
- 三一六頁——解題、其他。將來。future「來世」

- 同 四。抱きたくなる考。temptation 「受ける誘惑のあるのを想へば」
- 三一七頁—五。上座上智。power, goodness 「大能と恩寵」我國キリスト教成語としてこれをさる。
- 三一八頁—三。『天は地よりも高き』が如く。同じ意味ではあるが、日本譯詩篇には『天の地よりも高きが如』とある。
- 同 一六。『完全に達すべきな全能の神に見出せし』 to "find out the Almighty to perfection." 誤譯である『神の深事を窮めし』と云ふのが聖書による譯である。一體、聖書の句の如きは和文として慣熟せる標準譯が存在して居るのであるから、これを和譯せんとするものは特別の理由なき限りこれに準據すべきものと思ふ。
- 三二〇頁—三。全善。goodness キリスト教語、「恩寵」と云ふ。
- 三二二頁—七。人間第一の罪。the original sin of man 「人間の原罪」(承前)
- 三二二頁—五。二十五年。twenty years
- 三二四頁—九。それがために有閑の哲學者に。to the rank of philosopher by the possession of leisure 「閑暇が出来たので哲學者に」
- 三三三頁—類別。analogy 「類推」
- 三四一頁—八。不朽の詩人マード。Our immortal Bard 云ふまじとなく、シキークンギアである。引用された句がヤントニーとクレオパトラ第二幕第二場であるのを見ても明白である(谷口氏譯本、三四一頁参照)
- 三四五頁—一。ソロモンの有名な言葉、「日の下には新しき者あらざるなり」との聖書標準譯文望まほし。
- 三四八頁—四。奇蹟又は其の類のものを人間に示して、何人にも確信せしめ、一切の迷途を一切の論議を止めさせやう。of miracles, and of such a nature, as would have produced universal overpowering conviction, and have put an end at once to all hesitation and discussion. 「奇蹟及び」を末尾に到り 止めざるに足るやうな事がらを人間に示したかも知れぬ」として「其の類のものを」云々を除く。
- 三五二頁—一。世にこれ程理屈に合はなうことをはなう。Nothing can appear more consonant to our reason 正反對の間違「これ程理屈に合ふことはない。」のうで、前頁の最後の行「如何にいつてつと」は原文にはない。共にが誤譯の結果、入用になつて任意に附加したものである。
- 同 一二。こんな制裁のある人生は之を表せば苦痛の象となる。it is not wonderful that it should be represented,

sometimes, under images of suffering. 譯文の末尾に「いつてつと...となるのに不思議はなう」

同 一六。人間に對しては、無暗にその不敏をせめるものではない。instead of merely condemning to their original insensibility those beings 「それらの人間を再びその無覺感の姿に返らしめる(即ち生命を奪ふ)ものではない」

三九一頁—十。末尾。future 「來世」(承前)

同 一一。何等死の脅威もないのに勿々之を棄てなければならぬ程。would not always be ready to throw away, even if they had no fear of death 「死ぬのが恐くないのに」も「造作なく棄てる氣になる程」

註一。「Un livre réussit souvent et surtout propage dans le peuple une doctrine et un nom d'auteur beaucoup plus par ses exagérations et ses défauts que par sa sagesse et sa justesse; les attaques violentes sont aussi un des éléments principaux du succès. Cette chance échet à Malthus; si son ouvrage s'était présenté au monde sous la forme un peu lourde et terre de la seconde édition et des suivantes, encombrées de statistiques et vides de toute éloquence, il est probable qu'il n'aurait pas franchi le cercle des gens instruits et des penseurs;」Leroy-Beaulieu: La question de population, Paris 1913, p. 21.

註二。「In its first form the Essay on Population was conclusive as an argument, only it was based on untrue facts; in its second form it was based on true facts, but it was inconclusive as argument.」Bagehot: Economic Studies, ed. Rich. H. Hutler, London 1880, p. 137.

註三。この譯本の出版年は其書物には見當らなかつたけれども必要であるを考へたから附加した。考證 Hdw. d. Staatswiss., Bd. II. 4te Aufl., S. 804.

註四。マルサスが人口論について記した舊論文 Die Malthussche Lehre und die Bevölkerungsbewegung der letzten Decennien, München 1909 を一昨年訂正して發表したものの中に、初版の本文を参照するにあつて應々マルサー版中の抜萃を用ひたことによつても、マルサスに於て初版の譯本のなうことが確かめられることである(Die Bevölkerungslehre in „Konkrete Grundbedingungen der Volkswirtschaft,“ Leipzig 1914, S. 203).

五、正版譯本

われは既にアシレー版及初版について、その角も既述の如き譯本を持つた。然しながら最も

完全な、最も學問的價值ある正版の全譯を持たなかつた。初版の譯者は筆をそろへてマルサス説の叙述として初版が正版の補正を要すべきものであることを告げ、讀者の注意を正版の上に向はしめたにもかゝらず、譯書はなかつたのである。尤も正版がかく程まで重要であり、かく程まで注意をうけて居たにもかゝらず譯出々版せられなかつたことは翻譯界の怠慢であつたと云ふばかりでなく、正版と初版とを比較して考へて見ると一應の辯解は立つかも知れない。

初版原本は珍本である。其譯本は譯本であると共に複成本の役目をも果さなければならなかつたけれども正版、即ち第六版以後變更されなかつた形態の下におけるものは一般の譯書の場合と同じに譯本として譯される必要があつただけである。第六版及其後の版である完成版以外の種類のものを正版について求める特志者にはこの言葉の正版と云ふ意味があてはまらないけれども、ここにはかゝる要求は重んじて居られない程切迫した完成版に對する要求があるのだ。その完成版は第六版以後幾度か重刷され次の諸版が流布されて居る。

6th ed. 1826, London John Murray, 2 vols.
7th ed. 1872, London Reeves & Turner, 1 vol.
8th ed. 1878, " " "
9th ed. 1888, " " "

10th ed. Reprinted from the last edition revised by the author, with a biography of the author, full analysis & criticism, introd. by G. T. Bettany, 1890, London Ward, Lock & Co., 1 vol.
其他フランス及ドイツには正版出版直後それ／＼譯書が出たことはアシムレー版序文にある。近年の出版にかゝり且我國に知られてるものに次の諸譯がある。

Essai sur le principe de population, etc., Trad. par Pierre et Guillaume (Prévost de Genève), précédé d'une introduction par Rossi, et d'une notice sur la vie et les ouvrages, formant le sixième volume de la Collection des principaux économistes. Paris 1845.

Le même, 2^e édition, augmenté d'une avant-propos par J. Garnier. Paris 1852.

Essai sur le principe de population, choisi et précédé des préfaces des 2^e et 5^e éditions. Introduction par G. de Molinari. Paris 1890.

Versuch über das Bevölkerungsgesetz, nach der 7. Ausgabe des englischen Originals, übers. von F. Stöpel. Berlin 1879.

Dasselbe, 2. Aufl., durchg. u. vern. von Robert Prager, Bd. II. der Bibl. der Volkswirtschaft und Gesellschaft. Berlin 1900.

Eine Abhandlung über das Bevölkerungsgesetz, übers. von Dorn, Bd. VI/VII der Sammlung der sozialistischer Meister. Jena 1905.

第三の佛譯はモリナリの序文を除く時は極めて制限されたる抄譯である。

以上の重版並に譯本にまさつて更に今日の好學者殊に遠くはなれた我國に於ける讀者の翻譯を容易ならしめたものは倫敦の D. M. Dent による Everyman's Library が千九百十五年にその Vols. 692 and 693 として二冊物の第七版重刷を行つたことである。この舉は世界の民衆にマルサスを紹介するに重大な役目を果すであらう。

然しながら、だからと云つて、譯書が不必要であると云ふことは少しは辯護されない。一般に尙

は翻譯書が必要とされる意味に於ての必要を充すことが出来なかつたのは當然である。佐久間氏の正版翻譯は此の必要を充す爲に恰も時を得て企てられたとも考へられる。

一、佐久間原譯、マルサス人口理論(第七版譯)大正十四年、早稻田大學出版部發行。

この譯書について第一に云はなければならぬのは、譯者が序文に云つてゐるやうに、これは全譯ではないことである。然し、この譯書が全譯でない事情は、譯者が斷つてゐるよりも少々複雑なのである。

譯者の用ひた底本はエヴリマンズライブラリ版の二冊物で、それは第七版から長文の附録論文を省いて重刷したものであるが(同版書、第一卷 P. xvi)、省いたと云へば省いたのは附録論文だけではなく、序文が第二版以外のものは悉く省いてある。此點、譯者が「私の原本とせる第七版は Everyman's Library に屬し、第六版から長い附録をのぞけるものである……」(譯者序、二頁)と記して居るのは誤りで、第七版は前記の如くこの叢書以外にそして數十年も以前に同じイギリスに現はれ、嚴然として獨自の存在を持つて居る。況んや決して第六版のかくの如き亂暴な省略ではない。一體この版本は叢書が通俗向を主義として居るためにそれ自身の目的にとつては多分正當な理由で、かゝる省略を行ひ其省略の一部だけを明言してあるが、書題が不統一不正確であつたり、原版の全部に通じて掲げられた有名な且由緒ある書題を無視して何處にも記さなかつたり、殊に明言されてない省略の部分、即ち各版の履歴を示すべき興味深き序文を第二版以外のものは省いたりして居ることについてどう云ふ説明を試みるつもりで居るのか。

其叢書が通俗向のものであるから大體の内容さへ誤りなく傳へて居れば書題の如きはさうでもないではないかと云へばそれまでである。又私にしてもこの叢書版の原書を底本としてとに角も最初

の正版が譯出されたのでなかつたならば、以上のことを云ふ必要を認めなかつたかも知れない。もしそれ其譯書なるものが粗製急造のもので緊急通俗の要求を満す爲に生れた啓蒙版であると云ふならば、私の以上の批評は嚙言である。否以下の評言も嚙言であるであらう。然し私は譯者及譯書の讀者の何れもがかゝる確信の上に立つてゐるとは考へない。少くとも私は此譯本を以てマルサスの完成版の詳細を我國人に傳へる道德的責任を以て存在して居るものと考へて取扱ふ。

かくの如く既に省略を経た底本を更に省略したのがこの譯本である。この譯本の省略程度を示す。先づ第一に脚註の大部分が省略されて居る。原書第一卷(譯者に從つてこの文字を用ふ、Boone)に當る。)の中では、第一章第二章を除き他の十二ヶ章、第二卷の中では、第十二章、第十三章を除き他の十一ヶ章が省略されて、兩卷で譯出されてゐるのは四ヶ章にすぎない。第三卷第四卷はこれと其趣きを異にし、第三卷、十四ヶ章中省略されてゐるのは第十一章、第十二章だけ、第四卷は十四ヶ章悉く譯出されてゐる。前半において省略された箇所は東西古今に行はれた人口妨害に關する事例の叙述解説で決して輕んずべきものでないけれども、あまり大部になるからと云つて譯者は省略を行つた。云ふまでもなくマルサスの此の著のこの興味深き部分が省略されたことは、惜みてもまゝりあるけれども、これをも譯出して一書とすれば、内容字數初版の五倍、他の少部を省略しても書冊の尨大となることは云ふを俟たない。書籍は必ず商品なのだ、それも考へねばなるまい、更に、世にはこの著の理論的部分のみでもいゝから手頃なる書冊の譯書の出るやうにどの要求もあるに相違ないし、又それは差支もないのであるから、この譯書のやうな省略を経て生れたものを咎めてはならない。が、章數を數へただけでも底本の殆んど半分近くの省略の行はれたこの譯書について、譯者序に、第二卷から第三卷に亘り(それも不注意な間違、或は誤植で「第一卷から第二卷に亘り」の

わけである)かなり長々と記された事例の叙述解説が割愛されたとある以外には、表題にも扉にも又廣告文面にも、本文にも、省略の事實は示されて居ない。人は此の序文を注意深く讀むに非ずんば半分近くの省略の行はれた譯本とは氣がつくまい。勿論何處にも全譯とは云つて居ない。又あの昔冊で正版全部が入らないことを知らなければ無智でないとは云へない。然し、全譯と云つてなくとも抄譯なる旨を明示してない限り、人が全譯であるとは早断するとすれば、それは彼等自身の責であるか、將又譯者の不用意の責であるか。假に一步を譲つて讀者がこの注意書きを讀む責任を負はされたとしても、讀者は恐らくこれによつて省略の部分がかく程までに大部分であるとは想像しないであらう。そして其結果はマルサスの原著に對して事實と甚だしく異つた觀念を抱かしめられるに到るまでである。

由來譯者は(或はそれ以上に、出版者かも知れぬ)抄譯なる名目を嫌ふやうに見える。そしてかゝる名目を用ひないことは今日の翻譯界の常事であるかも知れない。それにしても私はかゝる習慣によつて、その甚だしい場合には、原著が其の通りの表題の下に自由に内容を伸縮して、公に傳へられ、其結果誤つた事實を生むに到るとすれば、原著者の名譽の爲にも學問の爲にも何等の防衛策を講じなければ、ならないやうに思はれる。

とまれ、我國に於てはじめての正版譯本が生れたのである。譯者が表題其他の所で一貫して第七版譯なる註を添えて居るのは、さきに譯出された初版の譯本が何れも添字をも附してないのに比して主客顛倒のさしひなきにしもあらずであるが、とにかくそれと區別を立たせる爲に初版と正版との區別を知らずして譯書を購入せんとするであらうところの人々に對して親切である。それから久しく正版を手にすることを求めた好學者の特別な注意をひく爲にも適當である。彼等はマルサス人

口論の在來の種々の和譯本の現れた都度、軽い失望を感じて來て、最後にこの譯本の現れることを待つたのであつた。

譯者が此譯書に對して附した名稱によつてマルサス人口論著は我國に於て三つの異なる主題を得た。高野博士及大内教授共譯本は「マルサス人口の原理に關する一論」と題し、此譯本は「マルサス人口理論」と題し、他は悉く「マルサス人口論」と題す。而して最後のものは其慣用の年代永く範圍廣く、然も正版初版を通じての主題 *An Essay on the Principle of Population* なる文字に背馳せざる譯語である。「マルサス人口論」と云へば其學說を知る人には直にその著書の思ひ浮べられるにもかゝらず、幾多の新譯名を考案するのは考へものである。この意味に於て私は谷口學士が其譯本を題するに當つて、表題を慣用のものを以てし、扉に於て逐次譯名を掲げた用意を賞讃したく思ふ。もしそれ正確逐次の書題名を以て上々のものとするならばアダムスミスの國富論の如き優れたる譯名をも改めなければならぬであらう。然もそれすらもはじめ「富國論」(例へば明治四十三年發行三上正毅氏譯著のもの)であつたものを、「國富論」(例へば竹内謙二教授著譯「アダムスミス研究」、氣賀博士譯「國富論」)と改めたものではある。書題は歴史上の固有名詞であるから輕々しく譯出すべきでないと思ふ。(Cf. Jevons: *Theory of Pol. Econ.*, Preface to II. ed.)

この譯本の體裁は底本が底本だけに、初版の譯者が互に相競ふて原書との連絡をとりこれを模寫せんとまで試みたのと趣きを異にする。原書原版にある長い書題は何處にも示されていない。たゞ「マルサス人口理論」だけである。折角「マルサスのこと」として小傳を叙して居る文中に、正版の原名を原語で記し、これを初版のものとの對比させるの勞を取つては居るが、其書名主題を *An Essay on Population; or a View etc.* と誤つて居るのは残念である。なほ其に續く副題中 *mitigation of the evil*

たるべきを immigration of evil とし、初版副題中の M. Condorcet とあるべきを Mr. Condorcet と書
いてるのは誤植でもあらうか。さうとしても残念な誤植である。

この譯書に収録されてある部分については、極く稀に且僅かに句又は文が省略されてある以外、本
文は忠實なる原文の再現であり、そしてかなり見事な再現である。譯者の文章は洗練された日本語、
原文の精神を察して巧にこれを織り込んだ日本語である。多くの人々は、容易のやうに見えて實は
甚だ困難の多い翻譯と云ふ仕事の自分の経験を思ひ返して、この譯者の譯文に及ぶほどの譯文を書
くことを自分が出來るかどうかを感ひ、従つて譯者の業績に感謝するであらう。私はこの譯本に對
しても高野博士及大内教授共譯の初版譯に献げたやうな否或はそれ以上の禮讃を献げたく思ふ。私
は先づ何よりも讀んで不快と苦痛を覺えることのない日本語でもつて樂々と正版の重要な部分を讀
むことの出来るやうになつたことを喜ぶ。はじめて試みられた正版譯は成功であつた。今後もし此
以外に正版譯が出るゝすれば省略された部分が補はれることと、少くとも正規な標準版を底本とす
ることが目的であると共に、此譯文だけの或はそれ以上の優れた譯文を書き上げる覺悟がある。そ
してそれを遂げることは一方ならぬ努力を必要とする。

このよき譯本においても残念ながら私の同意し得ない解釋或は譯語がないではない。今、アシレ
ー版について三上氏譯を取扱ひ、初版について高野大内兩先生共譯を取扱つた時の同じ精神でもつ
て卒直な異論を陳べ、譯者に充分に敬意を拂ひながら私の責任を明かにしておきたいと思ふ。例に
よつて、頭書、頁數は譯書數字は同じく行數、其下に譯文、其下に原文を記し、私見を加へる。原文
につく頁數はエヴリマンズライブラリ版により、その第一卷だけに其旨を示し第二卷については
たゞ頁數だけが記されてある。

二〇頁—六。労働の表面價值が下落することをめつたにない現象である。 It rarely happens that the nominal price of la-
bour universally falls (vol. I, 17) 「...表面價格が一般に亘つて下落する...」である。この他の所でも譯者は價值と價格
を混同してゐる。

二三頁—一。スミスミルト。Susmilch (vol. I, 295) これは多分原書が悪いのであらう。マルサスの如何なる種類の英語
版を見てもこの綴字である。佛、獨譯では皆 Susmilch を直してある。英國でも今日は皆一般にこの綴が使はれてゐる。其當
時の習慣であつたのかマルサスの我流だつたのか、この Susmilch の綴りの由來はわからない。我國でも一般にド、ツ讀
みに「シュスマスミルト」(經濟大辭書其項、森理學士著、統計學概論、十四頁、等)と云つてゐる。(註)

二四頁—。統計數字の誤り、或は誤植かも知れぬ。年平均の一七二一年に至る五年間の段、死亡對出生の比の欄、106:177
は 100:177 に。黒死病の年を除ける六十二年の段、死亡對出生の欄 936:324 は 936:087 に。此ほか「噸字が三個所ある」(vol.
I, p. 296)

三〇頁—一。五分の一。one-third (vol. I, 29) 同。Kurmark 或は la Mar-
the electoral「ブランデンブルク選挙伯領」を指す云ふ。

三二頁—十。ブランデンブルクのノムメルツ。the Neumark of Brandenburg (vol. I, 300) 同。く「ブランデンブルク新
邊領伯領」を指す。兩者とも原文では地名のやうである。現に Sachsen の田舎には Neumark を指す村がある位である。

五〇頁—一。幾何學の言葉で、in algebraic language (vol. I, 312) 「代數」

五二頁—九。年齢の老若。their youth or their age (vol. I, 314) 「國士の老若」或は「國の新古」

六六頁—一。無限、indefinite (5) (これより以下原書第二卷) この場合の文意から云ふに此言葉を infinite 或は unlimited
等と對立させねばならない。數學には「無制限」を云ふ譯語がある。

七一頁—一三。有機的。organic (6) 「生理的」

八一頁—三。他方に就いて性的満足さう誘惑は少年の戀着を刺戟するに十分な力である。An unshackled intercourse on
the contrary would be a most powerful incitement to early attachments (14) 「それに反して束縛を解いた、男女の自由交
際は早婚を起す充分な刺戟となることをあらう」。

- 八三頁—一四。最初の罪。original sin (16) 「原罪」初版譯の時の説明参照。
- 一〇二頁—一三。其の子供を曝らし者にする。have their children exposed (28) 「遺棄」
- 一〇六頁—一。歸つたが。were returning (31) 「歸りながら居たが」
- 同 十三。ギリアン。Guiana (31)
- 一〇八頁—十三。母語。mother-country (33)
- 一一〇頁—一。船賃をこつて。又移民が落ち付いて職業を發見するに到る迄の期間衣食する爲に。vessels for the voyage, and support and assistance till the emigrants can settle themselves, and find employment in their adopted country (34) 「船舶の提供をこつて」
- 一一六頁 五。寄附金。sum 救貧法に寄附金はおかしい。たゞ金額、徴集だから、税金である。
- 同 — 一一。事實はむしろ人々の考へて居るの違ふのだらふ。こゝに「層階嘆するであらう。即ち所得一磅に付四志を徴集する代りに十八志を徴集する」によつて始めて救貧の實を多少でも擧げ得るのだと聞いたならば定めて驚嘆するであらう。would be much more astonished if the fact were otherwise than it is observed to be; or even if a collection universally collected were made in the pound, instead of four, were materially to alter it. (38) 「事實がもしも人々の考へて居るの違つてたならば却つて一層怪訝に思ふ位であらう。それが假に所得一磅に付 擧げ得るやうなことをあつてさへ同じである」
- 一二七頁—六。假定。conclusion (38) 「結論」
- 一二六頁—六。産兒の率。it (46) 「賃銀」
- 一三二頁—九。若し豫期せられる通り全然獨立の精神が減退してしまつたものとすれば、其れは既にすつと昔に表面に顯れて來なければならぬ筈である。had they succeeded as completely as might have been expected, their pernicious tendency would not have been so long concealed. (49) 「つゞ行つて完全に成功したとするならば、其の恐るべき作用がこゝにいつまでも見えないで居るわけはないのである」
- 一三四頁—一。授産所に於ける全事務。The whole business of settlements (50) 「全體、定住居所などと云ふことが徹頭徹尾(承前)」

- 一三七頁—七。遊樂のため。for business or pleasure (52)
- 一四四頁—四。行ふことが出来なかつた。does not fulfil (57) 「行つては居ない」。こゝしなければ次頁の第二齣の論が空に浮く。
- 一五〇頁—一。浮浪人。pauperism (60) 勿論「人」ではない。「浮浪」でもない。「要救助の貧困」である。譯者は全文を通じてこの解釋を用ひ、又 pauper を「浮浪人」の例、一五四頁、末行、p. 64) を解釋してゐる。
- 一五五頁—八。結婚に對する直接的立法。direct laws against marriage (64) 「結婚禁止の明文法規」、禁止と云つても或場合についての禁止で、一般的には制限と同じ結果になるから出産は絶無にならぬ。
- 一五八頁—四。生めや殖せや。これはどうでもよいもの、日本語聖書の一句として成語なのであるからそれを用ひたい。「生めよ殖えよ」
- 一六三頁—題名。重農主義。Agricultural System (70) 「農業立國論」、何故ならば、重農主義なる名辭は別の意味を持った學語であるから。
- 一六四頁—一四。勞働階級富力の唯一の缺點。The only drawback to the wealth of the labouring classes (71) 「勞働階級の幸福を妨げる唯一のこゝ」
- 一六六頁—十。賃銀と資本とを大に投じて、沃土が十分にあるといふ事實が他方に存在して賃銀と資本利潤の昂昇を阻止し。the abundance of good land would counterbalance the high wages of labour and high profits of stock (72) 「賃金と資本利潤が不廉であつても、沃土が……資本利潤の不廉とに均衡し、そして次の行の「抑制せられない」と均衡せしめられない」をみる。
- 一六八頁—三。地代と共に。as far as rent goes (73) 「地代が騰じただけ」
- 一七二頁—二。特殊な他の方向。the particular direction (75) 「特殊な他の方向」をすべからざるは第三行の「農業勞働の十分公正な發達を阻害する」の原文 prevents its full and fair development in that direction を見てもその次の一齣の文章を見ても明瞭である。
- 一七四頁—九。或國家が主として農業國として考へるべきや否やといふことは剩餘農産物の一部を國內で消費せずして他國品を代へる方が其の國にとりて適切なりや否やに依つて定まるのである。It will depend of course entirely upon its answer-

此一文の掲載を本誌に請ひたるは、筆者竹村君が他人の誤譯を指摘して自ら痛快を叫ぶものではなくして最も熱心なる人口論の研究者であり此一文は其所産の一端を示すものであるからである。世人の誤解を防がん爲に特に一言を贅す

三邊金藏

前號 (第二十卷) 目次

(大正十五年十一月號)

- 物價の季節的變動 高城仙次郎
- マルクス共産社會觀の一批評 加田 哲二
- 富神開眼と懶惰奢侈よりの解放 高橋誠一郎
(古希臘經濟思想研究の一節)
- シニョアの勞銀論 濱田 恒一
我國勞働法に關する最近の收穫 岡 乾 治
- 「キリアム・ゴドキン」政治的正義 伊 藤 秀 一
新刻版
- Fisher—Mathematical Introductions in the Theory of Value and Prices. 寺 尾 琢 磨

● 一冊定價金五拾錢 郵税金壹錢五厘
● 一ヶ年分金貳圓九拾錢 郵 稅 共
● 一ヶ年分金五圓四拾錢

● 編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
● 營業に關する用件は發賣元宛
● 原稿締切期日は發行の前月十日限

大正十五年十一月廿日印刷納本 每月一回一日發行
大正十五年十一月一日發行

三田芝區三田二丁目二番地慶應義塾内 編輯者 江 田 範 保
三田芝區新町五丁目四十二番地 發行所 金 子 鐵 五 郎
三田芝區新町五丁目四十二番地 印刷者 金 子 活 版 所
三田芝區新町五丁目四十二番地 印刷所 金 子 活 版 所

發賣元 東京市芝區三田貳丁目壹番地
丸善株式會社三田出張所
電話高輪 一九二六

發行所 東京三田芝 慶應義塾内 理財學會

● 尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す